

ザ・紺碧

WASEDA UNIV. ALUMNI
小金井稲門会
KOGANEI TOMONKAI

発行: 小金井稲門会
事務局: 小金井市東町4-13-12-307
皆川保則方
電話: 080-5467-2270

目次: 1～5P「特集」 6P「女子会リレーエッセイ」 7P「うちの部会はこちらが魅力です」 8P「新会長紹介」

特集 戦後70年 それぞれの時代を語る

神国・日本は敗れ、マッカーサーが降り立った。焼け野原から復興へ。
その激動の戦後も、はや70年。あの日、あの時。多感な学生時代に見たものは何だったのか。
それはその後の人生をどう左右したのだろうか ―。

今回の「ザ・紺碧」は、戦後70年特集です。編集チームが総力で取材にあたり、3つのことを聞きました。
第一に「学生時代に最も印象に残ったことは？」。第二に「自分の針路を左右した出来事・人物は？」。
最後に「学生時代に勉強をしましたか？しなかったとしたら何を？」

小金井稲門会・役員のみなさんが生きた時代(1982年まで) 会員のみなさんの思い出は？

卒年	出来事			
1952	講和条約発効 独立回復	増田義雄(理)		
1953	朝鮮戦争休戦 NHK放送開始			
1954	ビキニ被曝 自衛隊発足	武蔵幸雄(法)		
1955	55年体制 神武景気始まる			
1956	国連加盟 「もはや戦後ではない」	山中邦彦(政)	林茂夫(政)	深澤好友(政)
1957	スプートニク 原子の火灯る	山下芳昭(理)		
1958	皇太子婚約発表 東京タワー	浅黄優喜(商)		
1959	岩戸景気 中ソ対立	坂井研次郎(理)	大久保勝則(文)	松井義信(政)
1960	安保闘争 浅沼刺殺	小島敏男(教)	関口弘治(政)	
1961	所得倍増計画開始 レジャー	外川嚙善(教)		
1962	キューバ危機 東京でスモッグ	西村正臣(商)		
1963	ケネディ暗殺 力道山刺殺	亘理鐵哉(理)		
1964	新幹線開業 東京五輪 王55本	伊藤佳子(教)	梅根憲生(商)	島村芳哉(商) 高橋康久(法)
1965	日韓条約 いざなぎ景気 ベ平連	西牧雄二(政)	福田卓雄(法)	
1966	ビートルズ来日 黒い霧事件	永井庸夫(理)	鎌谷功(商)	森勝信(商)
1967	美濃部都政 非核3原則表明	石井嗣剛(理)		
1968	GNP世界第2位に 3億円事件	篠崎潔(法)	田口信子(教)	藤森勝年(法)
1969	安田講堂落成 金田400勝	國分ひろみ(文)	中村一夫(法)	平野征兵(法) 増田章夫(文)
1970	万博 よど号 三島自殺	河村雅敏(法)	石井達久(社)	
1971	ドルショック 中共和国連加盟	藤井泰博(商)		
1972	浅間山荘 沖縄復帰 日中国交	立松英信(理・院)		
1973	金大中事件 石油ショック	皆川保則(政)	金子正和(政)	
1974	田中辞任 初のマイナス成長	今中京平(政)	今中律子(文)	
1975	ベトナム戦争終結 第1回サミット	金ヶ江博紀(法)		
1976	ロッキード事件 新自由クラブ			
1977	王556本 文革終結 カラオケ			
1978	成田空港開港 鄧小平来日			
1979	第2次石油ショック イラン革命			
1980	大平急死 自動車世界1位			
1981	臨調発足 貴ノ花引退	坂本光正(法)	佐藤和雄(政)	
1982	中曽根内閣 東北上越新幹線	中村彰宏(教)	福岡貴子(教)	



*お名前は順不同・敬称略。スペースの都合で会員のみなさんのお名前や1983年以降にご卒業された役員の方は表に入っていません。ご容赦ください。

敗戦から独立へ

増田義雄さん(1952年卒・理工)

「民主主義」を知った

戦争中は浦和中学の生徒でした。軍事教練ばかりやっていたり、戦車をつくるのに鉄工所へ動員され、ほとんど勉強していません。



終戦間近、一人の教師が赴任してきました。その教師が教室で配属将校に殴られていたのを目撃し、「あの先生は一体何者だろう」と思いました。戦争が終わると、その教師が「君たちに民主主義を教える」と言って、ある問題で生徒たちを賛成派と反対派に分けさせ、ディベートをやらせたのです。それは実に強烈な印象でした。

その先生が早大史学出身の藤間生大（とうま・せいだい）さんです。

彼が著した『埋もれた金印 女王卑弥呼と日本の黎明』（岩波新書）はベストセラーになりました。藤間先生の弟子になった生徒も多かったですね。

1945年8月15日は、終戦の詔書をラジオで聞いた後、5、6人の仲間で皇居へ向かいました。

「電車が動いているんだったら行ってみようよ」と。

皇居へ向かって歩いていると、遠くから何か音が聞こえてくる。何だろうと思いながら近づくと、人々が倒れて号泣する音だったんです。

「学問」への渴望

昭和22年に早稲田第一高等学院に入学した時、学生たちの半分は軍服を着ていました。陸士や海兵などにいた若者たちが「もう一度学問を」と集まったのです。腹も減っていたが、学問にも飢えていました。それに30代前半の先生たちが一生懸命に教えてくれました。とにかく本を読むことが楽しかった。聞くもの見るものがすべて新しいのですから。

様々な人材が集まり、豊かな交流ができました。その中で、電電公社の技師長となった中尾徹夫さんに伝送工学を教わりました。実に面白かった。それが私の人生を決めたのです。（聞き手・佐藤和雄）

山中邦彦さん(1956年卒・政経)

「入学」自体が大事件

在学中は、サンフランシスコ平和条約の発効など、色んなことが起きましたが、私にとっては岡山から上京し、早稲田に入ったことが最も印象深い出来事でした。見るもの、聞くものがすべてに新しいのですから。

語学でフランス語をとったクラスメイトとの交流は今も続いています。

毎月1回、クラス会をやっているんですよ。続いている理由の一つは、仲間にNHKのアナウンサーの生方恵一君がいたことです。紅白歌合戦で都はるみを美空ひばりと言い間違えそうになって話題を呼んだ生方君。残念ながら昨年、他界しました。

もう一つは、当時、政経には4人しか女子学生がいなかったのですが、わがクラスにはその1人がいたのですよ。



歌舞伎に演劇に

授業のない日は東京のまちを良く歩いたものです。政経学部の校舎に近い演劇博物館に行ってから、歌舞伎にも興味を持ち、最初は安い「幕見」で見えていたんですが、学割があることが分かって3等席で毎月行くようになりました。歌舞伎の華やかさ、せりふ回しの美しさが魅力でした。新派、新国劇、前進座にも時々、足を運んだものです。

金融論を学ぶ

ゼミは金融論の堀家文吉郎先生にお世話になりました。『利子と物価』を著したスウェーデンの経済学者クヌート・ヴィクセルの利子論などを勉強しましたね。同級生の多くは銀行に就職しましたが、私はトヨタ自販を選びました。自動車産業がまだどうなるか分からない時代です。心配する声もありましたが、「面白い会社だ」と感じ、入ったのです。今のような「世界のトヨタ」になるとは予想もしていませんでしたが。（聞き手・佐藤和雄）

60年代前半

巨理鐵哉さん(1963年卒・理工)

吉展ちゃん事件と「花の生涯」

卒業したのは50年以上も前になるけど、当時のことで今でもはっきり覚えているのが、1963年に起きた「吉展ちゃん誘拐事件」。日本で初めてテレビやラジオで犯人の声を公開して、情報提供を求めた国民的関心の高い事件だった。戦後最大の誘拐事件といわれたけど、ほんとうに痛ましい事件だったね。

同じ年にNHKで大河ドラマが始まったのも鮮明に覚えているよ。第一作目は江戸幕府大老・井伊直弼の生涯を描いた「花の生涯」。直弼を悪役とするドラマや小説は多いけど、「花の生涯」は違っていた。

幕末当時、変節する人の多いなかで、戦争をせずに開国を強引に決めた直弼の一途な姿勢は評価できると、ドラマを見た頃も、今もそう思うね。



学校より旅行だった

学生時代はあんまり勉強しなかった。理工学部は必修科目の単位が取れないと進級できないので、進級に必要な最低限の勉強くらいはしたかな。

代わりに熱中したのが旅行だった。キャラバンシューズを履いて大きなリュックを背負い、足は国鉄の均一周遊券、宿は寺やユースホステルという貧乏旅行で、日本各地を周った。ユースホステルでは、夕食前に館長さんと宿泊者全員のミーティングがあって、まず自己紹介をして、それからみんなでワイワイ話をするんだ。

旅は人との出会いというけどそれを実感したね。小樽の海辺で知り合った人に「うちにも早稲田の息子がいるから、家に泊まれ」といわれて、積丹半島にあるその人の家に泊めてもらったこともいい思い出だね。

学生旅行の集大成のつもりで、卒業課題は「ユースホステルの設計」にしたよ。(聞き手・福岡貴子)

伊藤佳子さん(1964年卒・教育)

安保反対デモ

田舎から出てきてまずびっくりしたのは「安保反対運動」。「アンボ、ハンターイ」という掛け声が学校中にうねりになっていたんだから。

デモにも一度だけ参加しました。それともうひとつ、とても印象的だったのは野球の早慶戦の盛り上がり。

この二つが私の2大ビックリ事件です。



アナウンサーか教師か



教師になりたかったので教育学部に。教職課程で中学と高校の教育実習に行った時はとてもうれしかった。

入学と同時にサークルで放送研究会にはいっていました。その放送研究会で先輩の話をいろいろ聞く機会があり結局先輩の勧めに応じてアナウンサー試験を受けたんですね。

6次まである試験に受かったちゃったんですよ。それでアナウンサーか教師かですごく迷った。でも最後は先に合格させてくれたアナウンサーにしました。

山梨県人会での活動

学生時代に熱心にかかわったもうひとつが山梨県人会。私は山梨県出身だったので県人会に入って、いろいろやりました。とくに故郷に帰ってのイベント活動などすごく楽しかったです。勉強はまあその次くらいかな。でも第2外国語のフランス語がすごく難しかったことを覚えています。(聞き手・金子正和)

70年前後のころ

國分ひろみさん(1969年卒・一文)

学生運動とプラハの春

私の早稲田時代は学生運動が非常に盛んだった頃で、学生は「反権力」「反体制」に燃えていました。

校内の至る所に「授業料値上げ反対!」のアジビラやポスター、立て看板が置かれ、演説や授業のボイコット、デモなんか日常茶飯事。

そんな環境だったので、1969年にチェコの学生が「プラハの春」(チェコスロバキアの民主化運動)圧殺に抗議して広場で焼身自殺を図ったことは、他人事ではない強烈な事件でした。



学内よりも飲み屋で哲学を学ぶ

父は常々「人間は如何に生きべきか」を言っていました。哲学科に進んだのはその影響です。

そこで宗教哲学の名物教授・仁戸田六三郎先生に出会います。昼間はクッキー、日が暮れると実存を落ち着かせるために一杯。

「孔子が言うのは○×じゃない、○も×も全部汲み込んでいく。現代はそのものずばりで具体的なことでないと通用しない。具体的なものが必要ならその逆の抽象的なものも知る力を養っておかないと困る」と。

先生の赤提灯テチガク(先生の口癖のままに表記)の真髓は深く広く、そのときどきの難解な言葉が今も懐かしく思い出されます。

役者として舞台にあがったことも

教員免許のこともあり単位数は結構たくさん取ったものの、勉強より家庭教師のバイトや舞台美術部の活動、早慶戦等々も忙しかったです。

役者になりたい夢もあって、劇団こだまで、サルトルの戯曲「蠅」に復讐女神(エリニュエス)＝蠅で出演したこともあります。しかし、「学芸会か!」の評を受け役者を断念。勉学は身につかず、卒業後も試験の夢を見たり、いろいろ不完全燃焼で彷徨した学生時代でした。

(聞き手・福岡貴子)

藤井泰博さん(1971年卒・商)

三島事件と小百合さん

70年11月の三島事件は、ちょうどゼミが始まる前。仲間のゼミ生から三島由紀夫が陸自市ヶ谷駐屯地に立てこもる報せを聞き、

＝右ページの写真＝
大変驚いたことを鮮明に記憶しています。三島に私淑する「楯の会」には、早稲田の学生も多く、知人もいたことを思い出します。



もう一つ、入学間もないある日、図書館にいと、すでに有名だった吉永小百合さんが私の目の前に座って勉強を始めたのです。化粧もしていない綺麗な小顔が印象的でした。

悩みぬいて挑戦へ

大学4年の時、ある会社に内定していました。しかし、父親に長男と言われたことも心にあり、自分を満足させる仕事とは何か、卒業前まで考え抜き、内定を辞退し、公認会計士への挑戦を決意しました。

指導教官や親の温かい理解があったおかげで、公務員として働きながら勉強を続け、数年かけて困難を乗り越えることができました。

一発勝負も楽しからずや

学生時代は、経営者を目指していたため、経営組織論のゼミに2年間所属していたのですが、今の仕事に関わる試験勉強は卒業後に始めました。卒業後も、下宿に住み続け、大学図書館を利用し、ワセダで志を同じくする学生と自習する空間や雰囲気を共有しました。その経験は、難関に挑むモチベーションになりました。

今思えば、試験会場は冷房がなく、体調を崩したり、電卓が壊れたりアクシデントに見舞われる受験生も。精神的、肉体的コンディションを整え、運を味方に年に一度、一発勝負するのは、楽しい一面もありました。

今の若い世代は、昔に比べて、チャレンジできる環境が整っているので、ぜひがんばって欲しいと思います。

(聞き手・遠藤圭司)

70年代から80年代へ

皆川保則さん(1973年卒・政経)

中村彰宏さん(1982年卒・教育)

六大学野球の優勝経験が一度もない



とにかくいろいろな出来事が次々とありました。

入学した年は東大入試がなかった。

それから7月20日、アポロ11号で人類が初めて月へ、1970年3月31日はよど号のハイジャック事件、11月25日三島由紀夫自殺、翌年8月15日米ドルの金本位制をやめる、これで1ドル360円の固定

相場がくずれていく、1972年浅間山荘事件、札幌オリンピック、沖縄返還、9月に田中角栄による日中国交回復。48年第一次オイルショックから狂乱物価へと――。

でも一番印象的な事は、早稲田の優勝がないことです。

超青田狩りの売り手市場

なにせ3年生の12月には金融、商社関係は就職がほぼ決まっていた。

だから成績なんて1年、2年のときのものだけ、それも試験がないときもありました。だけど私はメーカー志望でしたのでメーカーに。



他人のやりたがらない仕事を経験

熱心にしたのはアルバイト、それも家庭教師などではなく他人のやりたがらない仕事ばかり、例えばアドバルーン上げ、ビルの屋上からなのでかなり怖い。

あとは製本屋さん、紙を扱うので結構、力がいる、体育でウエイトリフティングをとっていたから丁度よかったです。

もうひとつはゼミかなあ。南北問題がテーマのゼミだったんですけど、当時のベトナム問題なども含めてずいぶん熱心にやりましたね。(聞き手・金子正和)

アメリカ文化にふれる

バブルが弾ける前、時代は高揚感に包まれ、その只中にいました。所属したサークルの英米留学会で勉強と遊びを両立しながら、他大学のメンバーとも活動や交流を深めました。

とりわけ、アメリカ文化や洋楽に影響を受ける世代が多い時代にあって、礼賛する訳ではありませんが、LAに短期留学して語学や文化に触れ、アメリカの多様性や一体感、スケールの大きさを実感しました。



例えば、アメリカで大リーグ野球観戦した際、様々な人種からなる老若男女が国歌を一斉に歌っていた球場の雰囲気と姿が印象に残っています。

交流が刺激に

入学前、父親の転勤で大阪より上京して、慌しく進路変更を余儀なくされましたが、早稲田に行くことになりました。自分のような地方出身者と首都圏の同年代が交流する中で、よい刺激にもなり広い視野を得ることができました。

もともとマスコミ志向があり、三省堂とJTBに内定しました。父親に相談し、旅行が好きなことはもちろん、幅広い業務に携われそうなJTBに決めました。

社会人として歩みながら、国鉄分割民営化を目の当たりにし、時代の変化を肌で感じました。

ボランティア活動と現場実習

教育学部の社会教育専修で真面目に勉強している仲間にも恵まれました。現在、小金井稲門会でご一緒している福岡貴子さんもそのうちの一人です。

自然の家での子どもたちへのボランティア活動を含めて、実践、現場実習を重視していました。

早稲田ではヨーロッパ美術、哲学・倫理学などの授業で影響を受けた素晴らしい先生が多く、自身の教養や趣味として、今でも日々の生活に役立っています。(聞き手・遠藤圭司)

女子会 リレーエッセイ

スーテラン騒動

田口 信子
(1968年卒 教育)



(左から3番目が田口さん。絵の仲間達とワインで乾杯)

2007年、早稲田大学の海外研究員として夫そして私は、1年間ドイツのフライブルクにあるマックス・プランク刑法研究所に行くことになった。

現地で住まいを見つけるのは難しいと聞いていたので、事前に研究所に頼んで住まいを見つけてもらい、契約をした。ネットで調べると、辺りは丘陵地帯で美しいところだとある。広さは85平米、家具はビーダーマイヤー様式とある。胸躍らせて向かった。



これが悲劇の始まりだった。

着いてみると、住まいは地下。カビ臭く、蜘蛛も巣をはっている。住まいにうるさいドイツにこんな部屋があるのかと、落胆で胸がつぶれる。

確かに家から一步出ると、辺りは天国のようである。眼下にフライブルクの町を見渡せ、遠くにフランスの山々がうかがえる。緑の中に、美しい家々がゆったりと立ち並ぶ。

一か月ほどして、研究所での体勢が整うと、夫は新たな住まいを探し始めた。それと同時に、家主に解約を申し出た。大家である女性の答えは、「Nein!」である。契約は一年だから、解約はできないという。後釜を自分で見つけるか、残りの月の分を払わないと出られないという。湿気で腰痛がひどくなったと、

健康状態を訴えてもダメである。地下室とは知らなかったと言うと、契約書に書いてあると言う。確かめると、番地の後に地下室(スーテランSouterrain)と書いてある。

しかし、住所に地下室と書くなど、私たちには知る由もない。そもそもスーテランというのはフランス語である。ドイツ語で地下という格好が悪いので、フランス語を使っているのだ。研究所の女性弁護士が、自信をもって私が解決すると言う。

しかし、彼女をもってしても、ダメだった。相手は、ご主人と息子が弁護士である。



夫は、市の住宅局に相談に行ったり、住宅の法律の本を買って勉強したり、後釜を探そうと、広告を掲載したり駆けずり回る。見に来て、だれも借りようとはしない。そもそも、ここは地下室だったものを、住居用に改造したということもわかる。

あまりの目途の立たなさに、私は「一生住むわけでないし、我慢したら」と夫をなだめる。私は、画材店で知った画家のアトリエに絵を習いに行っていて、家のこと以外ではルンルンなのである=写真。夫は誰もが認める温厚な人間である。それが、思いもかけない頑なさである。この人、私とよく離婚しなかったなど、いささか思い当たるところのある私は心中複雑である。



夫は、さらに別の弁護士のところに行く。話を聞いた弁護士は、天井の高さを調べるように言う。調べてみると、貸すには17センチ足りないことがわかる。地下室として貸すことはできるが、その場合、賃料は5分の1になる。弁護士は、払いすぎた賃料の差額、それと同額の慰謝料、弁護士費用からなる損害賠償と、さらに、相手の無知に乗じて暴利をむさぶる暴利罪で裁判に訴えると通告した。期限の前日、相手は要求の全額を払ってきた。

滞在期間の半分にわたったモグラ生活はこうして終わった。今もって、この弁護士に足を向けて眠れない。

うちの部会はここが魅力です

囲碁部会

～ 盤面に広がる小宇宙

ただいま会員募集中! 私たちがご指導します!! ～



毎回6～10人のメンバーが集い、年間では延べ100人程度が参加し、主に5月、11月に開催される早慶戦での勝利をめざして、研鑽を積んでいる。

金子誠一さん(1973年政経、6段)と慶応出身の弟さん(7段)が取り持つご縁で早慶戦が始まり、交流が続く。慶応は近隣地域の三田会より多くの有段者が集結し、層が厚い。しかし、最近の勝敗は、当部会の精鋭メンバーにより、早稲田に軍配が上がっているという。

○●○●

代表は、囲碁歴35年の山下芳昭さん(1957年理工)。会社員時代、勤務先近くの講習会に通ったことがきっかけとなり、碁の世界に親しんできた。

「対局を通じて考えたり、先を読んだり、頭を使うため、楽しみながら長生きできるのではないかと思います」と、その魅力を語る。以前は、代表だった鈴木隆さん(1951年政経)のご自宅で開催され、福祉会館を経て、本町の碁会所を拠点に活動中。

「現在、70代の参加者が多いですが、50、60代の会員にも入っていただきたい。初めての方にも、私たちがルールをしっかりご指導します」と心強いメッセージ。

○●○●

メンバーが囲碁を始めたきっかけは様々。中学時代からのベテランから、ブランク後に再開した方や初心者までキャリアも多様。今回、はじめての碁会所へお邪魔すると、皆さんの碁を打つ表情は、真剣そのもの。対局は、静寂な雰囲気にも包まれ、碁石の音が響く…。

「囲碁の魅力」をみなさんに聞くと――。
「碁石を握ると、心が落ち着く。布石を打つこと(物事の運び方)は、仕事の面でも活きた」

「囲碁を通じて、じっくり考えることができ、2人でやる趣味には一番いい」

「脳を使うので、老化防止に良い。そして、白黒の世界はそれ以上でもそれ以下でもない。将棋は王将を取れば勝ちだが、囲碁はどこを取れば勝つかわからない。その面白さに魅かれる」

「一つのゲームの中に、最初にグランドデザインがあって、中盤にストラテジー、最後は細かい読み(「寄せ」という)など異なった要素が入っている」などなど。

○●○●

将棋やチェスなど、おおむねコンピュータが優勢にある中で、「唯一囲碁は人間が勝る」そうだ。囲碁は、最初に駒が置かれていないため、自ら流れを創る必要があり、ファジーな要素があるゆえに人間が勝つ余地が大きいのだろう。

19×19の盤上には、小宇宙のような奥深い世界が広がっている。ところで、かの大隈重信侯は、大変な囲碁好きだったという。

引っ越し先を探す際、囲碁を持ち歩いて、空き家が見つかりと上り込み、一日中仲間と、囲碁に耽っていたそうだ。また、「将棋は戦いだが、碁は経済である」との言葉も。

囲碁部会は、第一日曜、第三土曜13時～17時の月2回、本町の碁会所(5丁目2、本町ビル)で開催中。

皆さんも、気軽に始めてみてはいかがでしょうかでしょう。

(遠藤圭司・記)



右から、大賀さん、金子(誠)さん、石さん、田中さん、土方さん、堀田さん、代表・山下さん、植木さん、高野さん、遠藤

新会長 西村正臣さんに「抱負」を聞く

60周年までに会員200人に



一言で言えば、魅力的な稲門会にしたいですね。魅力的な会にならないと会員が増えません。

小金井稲門会の50周年が2009年でした。次の60周年となる2019年が一つの節目です。その時までには現在167人の会員を200人にしたいと考えています。

(会員数が)半端な数字だと、多少減っても気にならないかもしれませんが、200人の大台に乗り、それを割るとなれば、みんな意識するでしょう。

そのためには、何といても「魅力のある稲門会」が大前提となります。

では、その「魅力」とは何か。世代によっても違うでしょう。

今、新たに活性化チームを発足させようと声をかけています。30代、40代、50代、60代の各世代にメンバーに入って頂き、一緒に何かやって頂いても結構だし、その世代ごとのイベントをやって頂いても良いと思います。

現在、小金井市内に住んでいる卒業生は1670人。世代ごとにみると、50代とその前後の方々がかなり多いんですね。一方、小金井稲門会の会員は60代、70代で70%を占めています。

現在の会員よりも「10歳ぐらい若い人たち」をターゲットにし、より魅力的な会にすることで、会の活性化を図りたいですね。

また、女子会の活躍も活性化の大事なポイントになると思います。



□プロフィール

1938年12月、長野市生まれ。秋田市などを経て東京・杉並へ。都立豊多摩高校時代には、ラグビー部と柔道部を掛け持ちしながら活躍。「早慶戦が面白い」という理由で早稲田大学へ。さらには「変わったやつがいつぱいのいる」と聞いて商学部を選んだ。卒業後は、製紙会社に就職。電気絶縁紙、トナー、半導体のテープなど「日本で最初」という商品を生み出すユニークさに魅かれたという。

文系ながら開発・研究・製造・営業のすべてをまかせてもらえることができた。

学生時代、最初は空手部に入ったが授業に出席できないため半年で退部。代わりに日本空手協会の東京都本部で修行を重ねた。全国大会に東京代表として出場し、東京チームのキャプテンを務めたことも。

空手は5段。70歳から始めた合気道は初段。30代半ばには夜間の専門学校に3年間通い、鍼灸師・あんまマッサージ師の国家資格を取得した。

2007年ごろに小金井市へ転居するとともに稲門会に入会。本町4丁目在住。

◆編集部から◆

「特集―戦後70年―それぞれの時代を語る」は皆さん、どう読まれたでしょうか。登場いただいた8人の方の青春物語は戦後70年のいわば前半の30数年ということになります。激動の中、どん底からいっきに坂道を登っていった日本。もっとも輝いていた時代だったのかもしれませんが。たまたま私がお話を聞いたお二人、伊藤さんは60年安保を皆川さんは70年安保を経験していました。それぞれが直面した戦後70年の一時代です。(金)